

小さなエコの大きな意味と信仰

すべてのいのちを守るために

吉川 まみ
上智大学教授

⑧ ささやかな「エシカル消費」で
人と自然の大きな保護を

能登半島地震の被災地の方々に心よりお見舞い申し上げます。すべての人の苦しみを担われたキリストがいつも共にいてくださいま

すように。

新年の始まりに当たって、今年の抱負としてエコ実践を紹介したいと思っていた今回、震災からの復興を願う言葉になるとは思ってもみませんでした。言葉を失う光景に、あらためて人間は、自然を何も知らないのだと思えました。

しかし、人間は、自然の一部というだけではない存在、支え合い、倒れてもまた歩き出せる存在、だということ我希望に、ささやかでも何らかの支援ができればと思います。今回は被災地支援にもつながる「エシカル消費」（エシカル＝倫理的な）をテーマにお話しします。

被災地に向けて
私たちにできること
地震発生直後、友人が、被災地

が、そのような余裕がないこともあるでしょう。

それでも、間接的にできる経済的な支援策として、返礼なしのふるさと納税のほか、環境への取り組みでも促進されている「エシカル消費」がとても参考になります。消費者庁によれば、「エシカル

消費」とは「地域の活性化や雇用などを含む、人・社会・地域・環境に配慮した消費行動のこと」です。もともと「エシカル消費」は、消費者の側からの構造転換を示すものとしてイギリスを中心に起こってきたムーブメント（運動）ですが、例えば日常的に購入しているものを石川県産のものにするといった配慮だけでも支援になります。

消費者一人一人が 有する影響力

大量生産の構造は、環境問題の主要な原因の一つとしてしばしば指摘されています。それは、大量生産の製品が、その原料調達から製造・加工・流通などのプロセス（過程）で、開発途上国の貧しい人々に過酷な労働を強いたり、森林伐採などの過剰な開発を助長したりしがちだからです。

例えば、先進国の私たちが食べているチョコレートは、森林伐採で開拓された大規模農園で収穫されたカカオが原料であることが少なくあ

りませんが、1970年代からその収穫はチョコレートの味を知らない子どもたちの児童労働によると指摘されていました。

その後、この問題は改善されてきたともいわれていますが、多かれ少なかれ大量生産というのは、製品のコストを下げて大量消費を促すことで利益を確保し、成り立つ構造であるが故に、弱い立場が犠牲になり、自然の再生能力を超える規模で自然資源を過剰に収奪する面があるのです。

この一連の構造に対して、産業側の問題を指摘することも大きなことです。しかし、私たちは誰もが消費者の一人として、悪気はなくてもこの大量生産の構造を支えているという一面もあります。ICT（情報通信技術）が発展した現代では、私たち一人一人の日々の物の買い方、使い方は、瞬時にビッグデータを成して生産者側に多大な影響を与えているからです。

単純なことですが、売れないものは生産されませんから、一人一人が日々の消費を変えることで、この壮大なグローバル経済を支える生産の構造でさえも変え得る可能性を持っているのだと言えるのです。

『真理に根ざした愛』の中で「物を買うということがつねに道徳的な行為であって単なる経済的行為ではない」（66）と述べています。

教皇フランシスコもこの部分を回勅『ラウダート・シ』206項に引用しています。たった一人でも構造を助長することも構造転換を促すことも可能だということを心に留めて、日々の買い物にも意志を込めて、生き方の哲学を表していきたいと思います。

また、被災地の地場産業や伝統文化・伝統工芸が震災によって途絶えることなく、継承されていくように、エシカル消費で支えていくことも重要な視点だと思われま

す。教皇フランシスコは回勅の中で、それぞれの場所固有のアイデンティティー（独自性）を支える文化の大切さも説いています。

「文化は、過去からの継承以上のもので、それは、何にも増して、生き生きとした、動的な、参加型の今ここにある現実であって、人間と環境とのかかわりの再考にとって外すことのできないものでもあるのです」（回勅『ラウダート・シ』143）

大震災で傷ついたすべての人々の心身と被災地域が一日も早く癒やされ復興することを願いつつ、日常生活のささやかな行為に愛と意志を込めて、共に力を合わせていきましょう。



1月7日、能登・穴水町の道路。片側が陥没し落ちた車が残る

©カリタスジャパン

大量生産の構造は、環境問題の主要な原因の一つとしてしばしば指摘されています。それは、大量生産の製品が、その原料調達から製造・加工・流通などのプロセス（過程）で、開発途上国の貧しい人々に過酷な労働を強いたり、森林伐採などの過剰な開発を助長したりしがちだからです。

例えば、先進国の私たちが食べているチョコレートは、森林伐採で開拓された大規模農園で収穫されたカカオが原料であることが少なくあ

りませんが、1970年代からその収穫はチョコレートの味を知らない子どもたちの児童労働によると指摘されていました。その後、この問題は改善されてきたともいわれていますが、多かれ少なかれ大量生産というのは、製品のコストを下げて大量消費を促すことで利益を確保し、成り立つ構造であるが故に、弱い立場が犠牲になり、自然の再生能力を超える規模で自然資源を過剰に収奪する面があるのです。